

源氏物語

夕霧二

紫式部

青空文庫

帰りこし都の家に音無しの滝はおちね

ど涙流るる

(晶子)

恋しさのおさえられない大将はまたも小野の山荘に宮をお訪ねしようとした。四十九日の忌も過ぎしてから静かに事の運ぶようにするのがいいのであるとも知っているのであるが、それまでにまだあまりに時日があり過ぎる、もう噂を恐れる必要もない、この際はどの男性でも取る方法で進みさえすれば成り立ってしまふ結合であろうとこんな気になっているのであるから、夫人の嫉妬も眼中に置かなかつた。宮のお心はまだ自分へ傾くことはなくとも、「一夜ばかりの」といつて長い契りを望んだ御息所の手紙が自分の所にある以上は、もうこの運命からお脱しになることはできないはずであると恃むところがあつた。九月の十幾日であつて、野山の色はあさはかな人間をさえもしみじみと悲しませているころであつた。山おろしに木の葉も峰の葛の葉も争つて立てる音の中から、僧の念仏の声だけが聞こえる山荘の内には人げも少なく、蕭条とした庭の垣のすぐ外には鹿が出て来たりして、山の田に百姓の鳴らす鳴子の音にも逃げずに、黄になつた稲の中で啼く声にも

愁いがあるようであった。滝の水は物思いをする人に威嚇いかくを与えるようにもとどろいていた。叢くさむらの中の虫だけが鳴き弱った音ねで悲しみを訴えている。枯れた草の中から竜胆りんとうが悠長に出て咲いているのが寒そうであることなども皆このごろの景色けしきとして珍しくはないのであるが、折おりと所とが人を寂しがらせ、悲しがらせるのであった。

夕霧は例の西の妻戸の前で中へものを言い入れたのであるが、そのまま立って物思わしそうにあたりをながめていた。柔らかな気にする程度に着馴ならした直衣のうしの下に濃い紫のきれいな擗目うちめの服が重なって、もう光の弱った夕日が無遠慮にさしてくるのを、まぶしそうに、そしてわざとらしくなく扇をかざして避けている手つきは女にこれだけの美しさがあればよいと思われるほどで、それでさえこうはゆかぬものをなどと思って女房たちはのぞいていた。寂しい人たちにとってはよい慰安になるであろうと思われる美しい様子で、特に名ざして少将を呼び出した。狭い縁側ではあるが、他の女がまたその後ろに聞いているかもしれない不安があるために、声高には話しえない大将であった。

「もう少し近くへ寄ってください。好意を持つてくれませんか、この遠方へまで御訪問して来る私の誠意を認めてくださったら、最も親密なお取り扱あつかいがあったしかるべきだと思いますよ。霧がとても深くおりてきますよ」

と言つて、ちよつと山のほうをながめてから大将がぜひもつと近くへ来てくれと言うので、余儀なく鈍色にびの几帳きちようを簾すだれから少し押し出すほどにして、裾すそを細く巻くようにした少将は近くへ身を置いた。この人は大和守やまどのかみの妹で、御息所みやすどころの姪めいであるというほかにも、子供の時から御息所のそばで世話になつていた人であつたから喪服の色は濃かつた。黒を重ねた上に黒の小桂こうちぎを着ていた。

「御息所のお亡かくれになつたのを悲しむことと宮様のいつまでも御冷淡であらせられるのをお恨みするのが私の心の全部になつて、ほかのことは頭にありませんから、だれからも私は怪しまれてしかたがありません。もう私に忍耐の力というものがなくなりましたよ」

これを初めにして、夕霧はいろいろと恋の苦しみを訴えた。御息所の最後の手紙に書かれてあつたことも言つて非常に泣く。少将もまして非常に泣く。

「その時のことでございますがね、あなた様がおいでにならぬばかりか、御自身のお返事もおもらいになれないままで暗くなつてまいりますのに悲観せかんをあそばしましてとうとう意識をお失いになりましたのに物怪もののけがつけこんで、そのまま蘇生そせいがおできにならなかつたのだと私は拝見いたしました。以前の御不幸のございました時にも、もうそんなふうにおなりになるのでないかと私どもがお案じいたしましたようなことがおりおりございました

が、宮様がお悲しみになつてめいつておいであそばすのをおなだめになりたいとお思ひになるお心の強さから、御健康をお持ち直しになつたのでございます。あなた様についての御息所のこのお悲しみ方を宮様はただ呆然ぼうぜんとして見ておいでになりました」

あきらめられぬようにこんなことを少将は言つていて、まだ頭はかなり混乱しているふうであつた。

「そうではあつても、宮様はもう常態にお復しになつてしかるべきだと思ふ。私に対してあまりな知らず顔をお作りになるのは、思いやりのないことではありませんか。もつたないことですが、孤独におなりになつた宮様にだれがお力になるとお思ひになるのだろう。法皇様はいつさい塵じんかい界と交渉を絶つておいでになる御生活ぶりですから、御相談事などは申し上げられないでしょう。あなたがたが熱心になつて宮様の私に対する御冷酷さをお改めになるようによくお話し申し上げてください。皆宿命があつて、一生孤独でいようとあそばしても、そうなつて行かないということもお話し申すといい。人生が望みどおりに皆なるものであれば、この悲しい死別はなされなくてもよかつたわけではありませんか」

などと夕霧は多く言うのであるが、少将は返事もできずに歎息たんそくばかりしていた。鹿しかがひどく啼なくのを聞いていて、「われ劣らめや」（秋なれば山とよむまで啼く鹿にわれ劣ら

めや独り寝る夜は）と吐息をついたあとで、

里遠み小野の篠原分けて来てわれもしかこそ声も惜しまね

と大将が言うと、

ふぢ衣露けき秋の山人は鹿のなく音に音をぞ添へつる

少将のこの返歌はよろしくもないが、低く忍んで言う声つかいなどを優美に感じる夕霧であつた。宮へいろいろとお取り次ぎもさせたが、

「この悲しみの中から自分を取りもどす日がございましたら、始終お心にかけてお尋ねくださいますお礼も申し上げられるかと思ひます」

と礼儀としてだけのことより宮からはお返辞がない。大将は失望して歎きながら帰って行くのであつた。途中も車の中から身にしむ秋の終わりがたの空をながめっていると、十三日の月が出て暗い気持ちなどにはふさわしくないはなやかな光を地上に投げかけた。それ

にも誘われて一条の宮の前で車をしばらくとどめさせた。以前よりもまた荒れた気のお邸やしきであった。南側の土塀どべいのくずれた所から中をのぞくと、大きな建物の戸は皆おろされてあつて人影も見えない。月だけが前の流れに浮かんでいるのを見て、柏木かしわぎがよくここで音楽の遊びなどをしたその当時のことが思い出された。

見し人の影すみはてぬ池水にひとり宿守もる秋の夜の月

こう口ずさみながら家へ帰つて来た大将は、そのまま縁に近い座敷で月にながめ入りながら恋人の冷たさばかりを歎いていた。

「あんなふうにしていらつしやることは以前になかったことですね。およしになればいいのに」

と言つて女房らは譏そしつた。夫人は痛切に良人おととのこの変わりようを悲しんでいた。これは心がほかへ飛んで行つていふ状態なのであろう、そうしたことに馴ならされた六条院の夫人たちを何かといえよ例に引いて、自分をがさつな、思いやりのない女のように言う良人は無理である、自分も結婚した初めからそう馴ならされて来たのであつたなら、穏

健なあきらめができていて、こんな時の辛抱しんぼうもしよいに違いない、珍しく忠実な良人を持つ妻として親兄弟をはじめとして世間からあやかり者のように言われて来た自分が、最後にみじめな捨てられた女になるのであろうかと歎いているのである。夜も明けがた近くなるのであるが、夫婦はどちらも離れた気持ちで身をそむけたまま何を言おうともしなかった。

起きるとまたすぐに、朝霧の晴れ間も待たれぬようにして大將は山莊への手紙に筆を取っていた。不愉快に思いながらも夫人はもういつかのように奪おうとはしなかった。書いてしばらくそれをながめながら読んで見ているのが、低い声ではあったが、一部だけは夫人の耳にもはいって来た。

いつとかは驚かすべきあけぬ夜の夢さめてとか言ひし一言

「上よりおつる」（いかにしていかによからん小野山の上よりおつる音無しの滝）と書かれたものらしい。巻いて上包みをしたあとでも「いかによからん」などと夕霧は口にしていた。侍を呼んで手紙の使いはすぐに小野へ出された。内容の全部はよくわからなかった

が、返事だけは手に入れて読みたいものである、それによって真相が明らかになるであろうと夫人は思っていた。

朝おそくなつてから小野の返事が来た。濃い紫色の、堅苦しい紙へ例の少将が書いたものであった。今日もまた自分たちの力で宮をお動かしかつることのできなかつたことが書かれてあつて、

お気の毒に存じますものですから、あなた様のお手紙へむだ書きをあそばしたのを盗んでまいりました。

と書いて、中へその所だけを破つたのが入れてあつた。読んでだけはもらえたのであるということであれしくなる大将の心もみじめなものである。むだ書きふうにお書きになつたお歌は、骨を折つて読んでみると、

朝夕に泣く音を立つる小野山はたえぬ涙や音無しの滝

と解すべきものらしい。また寂しいお心に合いそうな古歌などの書かれてある宮のお字は美しかった。他人のことで、こんなことを夢中になるまでの関心をもって楽しんだり、

悲しんだりしているのを、齒がゆく病的なことに思っていたが、自分のことになると恋する心は堪えがたいものである、どうしてこうまでになったのかと反省をしようとするのであるが、それもできないことであつた。

六条院も大将の恋愛問題をお聞きになつて、この人がなんらの浮いたこともせず、批難のしようもない堅実な人物であることに満足しておいでになつて、御自身の青春時代に好色な評判を多少お取りになつた不面目をこの人がつぐなつてくれるもののように思つておいでになつたことが裏切られていくような寂しさをお感じになつた。この事件の気の毒な影響から双方で犠牲を払う結果になるのであらう、全然関係のないところの女性ではなくて、妻の兄の未亡人の宮との問題であるから、舅しゅうとの大臣などもどう思うことであらう、それほどの思慮を持たないのではあるまいが、宿命というものから人はのがれられずに起こつてきたことであらう、ともかくも自分の干渉すべきことでないと院はお考えになつた。結局双方とも婦人の損になることで気の毒であると歎いておいでになるのであつた。御自身なの経験されたことに照らして見、また大将のこの現状によつて、亡なきのちの世が不安になつたことを紫夫人にお言いになると女によお王は顔を赤くして自分があとに残らねばならぬほど、早くこの世から去つておしまいになる心でおいでになるのであらうかと恨めしく思

うふうであつた。

「女ほど窮屈なものはありませんね。心の惹かれることも、恋しい感情も皆おさえて知らぬふうをしておとなしくしていなければならぬのでは生きがいもなし、人生の退屈さと悲哀とを紛らすことができずにはありませんか。そうかといつて感情に乏しい女になつては無価値だし、どうしてこんなふうに育つたのかと親さえも軽蔑したくなりますからね。ただ心でだけ思つて、お坊様が気の毒がる無言太子のようになつて、細かな感情も動きながら黙つていなければならぬ人にするのも無慈悲な親になる。こうであればあであり、それであればこうになる、どうして中庸を得るようになればいいかと、そんなことを私が考えるのも、他の女性のためではなく女一の宮を完全な女性にしたいからですよ」と院は言つておいでになつた。

夕霧が六条院へ来た時に、実状を知りたく思召す心から、院が、
「御息所の忌がもう済んだらうね。時はずんずんとたつからね。私が遁世の望みを持ち始めた時からもう三十年たつている。味気ないことだ。夕べの露にも異ならない命を持つて安んじていられるわけはないのだからね。どうかして髪を剃り落したいと望みながらのんきなふうを装っている。これはいけないことだね」

こんな話をおしかけになった。

「不幸ばかりで、もうこの世に未練はなからうと思われまます人でも、さて遁世はなかなかできないものらしいのでございますから、あなた様などは御無理もございません」

などと言つて、また大将は、

「御息所の四十九日の仏事のことなども大和守やまどのかみ一人の手でやっております。気の毒なことでございます。よい身寄りのない人は自身についた幸福だけで生きている間はよろしゅうございますが、死んだあとになつてみますと気の毒なものです」

とも言つた。

「御息所の仏事は院からもお世話をあそばすだろうよ。女二によにの宮みやはどんなに悲しんでおいでになることだろう。その当時はよくわからなかつたが、近年になつて事に触れて私の見たところではあの御息所は相当にりっぱな人らしい。院の後宮の才女には違いなかつた。そんな人の亡なくなつていくことは惜しい。生きておればよいと思う人がそんなふうには皆死んでゆくではないか。院もお悲しみになつたといふことだ。あの宮さんはここに來ておられる宮さんに次いでの御愛子だつたのだよ。きつとごりつぱだろう」

「さあ宮様はどんな方でございますか。御息所は無難な女性と見受けました。そう親密に

つきあつていたのでございませぬが、しかし、何でもない時に人格の片影は見えるものでございませぬからね」

などと言つて、女二の宮のことを話題にせず大將は素知らぬふうを見せているのである。これほど強い心でしている恋は、親の言葉くらいで思いとどまらせえられるものでない、用いない忠告を賢げに言うのもおもしろいことではないとお思ひになつて、院は何の勧告をもあそばさなかつた。

大將は御息所の法事をするのにあらゆる尽力をしていた。こんなことはすぐに評判になるもので、太政大臣家へも聞こえていった。不都合な話であると女性の側の悪いようにそこでは言われておいでになる宮がお氣の毒である。法事の当日は昔の縁故で大臣家の子息たちも参会した。派手な誦經はでずきようの寄付が大臣からもあつた。寄付はまだほかからも多く来た。競争的にこうしたことをするのが今日の流行である。

宮はこのまま小野の山荘で遁世とんせいの身になつておしまひになる志望がおありになつたのであるが、御寺みでらの院にこのことをお報じ申し上げた人があつて、

「そんなことはよろしくない。皆がいろいろな変わった境遇にいることも望ましいことではないが、保護者のない者が尼になつたために、かえつて浮いた名を立てられることがあ

ったり、俗でいる以上に煩惱を作らなければならぬことができたりしては、この世の幸福も未来の幸福も共に無にしてしまうことになる。自分が僧になつてゐる上に、三の宮が出家をしている。今また二の宮が同じことをしては、子孫の絶えていく一家と見られるのも、世の中を捨てた自分にとつてはかまわないことであるが、必ずしもまた今競つて出家は実現するに及ばないことだといふことは自分にもできる。不幸な時にこの世を捨てることをするのは見苦しいものである。自然に悟りができてくる時節を待つて、冷静に判断をしてしなければならぬことです」

こんな意味のことをたびたび御忠告になつた。大将との恋愛事件がお耳にはいつていたのである。大将の愛が十分でないために悲観して尼になつたと宮がお言われになることを院はおあやぶみになるのであつた。そうとはお思ひになつても公然大将の夫人になつておしまひになることを姫宮の完全な幸福とお認めになることもおできにならないのであるが、その問題に触れていつては宮が羞恥しゆうちに堪えられないであろうと思召おぼしめすとかわいそうなお気持ちかして、せめてこの際は自分だけでも知らぬ顔をしていてやりたいと思召した。

大将も立てられる噂うわさに言いわけをしてきたこれまでの態度はもう改めるほうがよい時期になつたと思ひ、女二の宮が結婚を御承諾になるのを待つことはせず、御息所の希望し

たことであつたからというように世間へは思わせることにして、この場合はしかたがないから故人にちよつとした責任を負わせることくらい許してもらふことにして、いつから始まつたといふことをあいまいにして夫婦になろう、今さら恋の涙のありたけを流して、宮のお心を動かそうと努めるのも自分に似合わしくないのであると思つて、山莊を引き上げて一条の邸やしきへお移りになる日をおよそいつといふこともこちらできめた夕霧は、大和守を呼んで、大将夫人としての宮のお歸りになる儀式等についての設けを命じたのであつた。邸の修理をさせ、勝ち気な御息所が旧態を保たせていたとはいふものの、行き届かない所があつた家の中を、みがき出したように美しくして、壁かべしろ代、屏風びょうぶ、几帳きちょう、帳台、昼の座席なども最も高雅な、洗練された趣味で製作させるように命じてあつた。

当日は夕霧自身が一条に来ていて、車や前驅の役を勤める人たちを山莊へ迎えに出した。宮はどうしても歸らぬと言つておいでになるのを、女房たちは百方おなだめしていたし、大和守も意見を申し上げた。

「その仰せは承ることができません。お一人きりのお心細い御境遇が悲しく存ぜられまして、御葬送以来ただ今までは、私としてお尽くしいたしうるだけのことはいたしてまいりました。しかし私は地方長官でございますから、お預かりしております国の用がうちやつ

ではおけませんので、近くまた大和へまいらねばならないのでございます。あなた様のただ今からのお世話をだれに頼んでまいってよいという人もございませんから、どうすればよいかと思っております場合に左大將が力を入れてくださるのでございますから、あなた様御一身について考えますれば、御再婚をあそばすことをこれが最上のこととは申されませんのでございますが、しかし昔の内親王様がたにもそうした例は幾つもあったことで、御自分の御意志でもなく、運命に従って皆そうおなりになったのでございますから、何もあなた様お一方が世間から批難されるはずもないのでございます。これほどのお方のお志をお退けになりますのは、あまりにも御幼稚なことと申すほかはございません。女性の方でも独立して行けぬことはないと思召すでしょうが、実際問題になりますと、御自身をお護りまもになることと、経済的事ことで御苦労ばかりがどんなに多いかしれません。それよりも十分大事に尊重申される御良人ごりょうじんにお助けられになってこそ、あなた様の御天分も十分に發揮させることができるのでございます。どうかそのお心におなりくださいませ」

大和守はまた、

「あなたが宮様へよく御会得えとくのゆくようにお話し申し上げないのが悪いのです。そうかというとまたこうしたことに立ち至る最初の動機などはあなたがたの不注意でお起こし

になつたりして」

と少将や左近を責めた。

女房が皆集まつて来て口々にお促しするのに御反抗がおできにならないで、きれいな色のお召し物などをお着せかえ申したりするままに宮はなつておいでになるのであるが、切り捨ててしまいたく思召すお髪ぐしを後ろから前へ引き寄せてごらんになると、それは六尺ほどの長さで、以前よりは少し量が減つていても、他の者の目にはやはりきわめておみごとなものに見えるのであるが、御自身では非常に衰えてしまった、もう結婚などのできる自分ではない、いろいろな不幸にむしばまれた自分なのだからとお思い続けになって、お召しかえになつた姿をまたそのまま横たえておしまいになつた。

「時間が違つてしまう。夜がふけてしまふだろう」

などと言つて、お供をする人たちは騒いでいた。時雨しぐれがあわただしく山荘を打つて、全体の気分が非常に悲しくなつた。

上りにし峰の煙に立ちまじり思はぬ方になびかずもがな

とお口ずさみになったとおりに宮は思召すのであるが、そのころは鉞刀はさみなどを皆隠して、お手ずから尼におなりになるようなことのないように女房たちが警戒申し上げていたから、そんなふうにお騒さわぎをせずとも、惜しく尊重すべき自分でもないものを、しいて尼になつてみずからを清くしようとも思わず、すればかえつて人の反感をかうにすぎないことも知つているのであるから、と思召して宮は御本意を遂げようともあそばさないのである。女房は皆移転の用意に急いで、お櫛くし箱、お手箱、唐櫃からびつその他のお道具を、それも仮の物であつたから袋くらいに皆詰めてすでに運ばせてしまったから、宮お一人が残つておいでになることもおできにならずに、泣く泣く車へお乗りになりながらも、あたりばかりがおながめられになつて、こちらへおいでになる時に、御息所みやすどころが病苦がありながらも、お髪くしをなでてお繕つくろいして車からお下おろしたことなどをお思い出しになると、涙がお目を暗くばかりした。お護まもり刀とともに経の箱がお席わきの脇へ積まれたのを御覧になつて、

恋しさの慰めがたき形見にて涙に曇る玉の箱かな

とお歌いあそばされた。黒塗りのをまだお作らせになる間がなくて、御息所が始終使っていた螺鈿らでんの箱をそれにしておありになるのである。御息所の容体の悪い時に誦經ずきようの布施として僧へお出しになった品であったが、形見に見たいからとまたお手もとへお取り返しになったものである。浦島の子のように箱を守ってお帰りになる宮であった。

一条へお着きになると、ここは悲しい色などはどこにもなく、人が多く来ていて他家のようになつていた。車を寄せてお下りおになろうとする時に、御自邸という気がされない不快な心持ちにおなりになつて、動こうとあそばさないのを、あまりに少女らしいことであると言つて女房たちは困つていた。大将は東の対の南のほうの座敷を仮に自身の使う座敷にこしらえて、もう邸やしきの主人のようにしていた。

三条の家では、だれもが、

「急に別なお家うちと別な奥様がおできになつたとはどうしたことでしょう。いつごろから始まつた関係なのでしょう」

と言つて驚いていた。多情な恋愛生活などをしなかつた人は、こうした思いがけぬことを実行してしまうものである。しかしだれも以前からあつた関係をはじめて公表したことと解釈していて、まだ宮のお心は結婚に向いていぬことなどを想像する人もない。いずれ

にもせよ宮の御ために至極お気の毒なことばかりである。

御結婚の最初の日の儀式が精進物のお料理であることは縁起のよろしくなく見えることであつたが、お食事などのことが終わつて、一段落のついた時に、夕霧はこちらへ来て宮の御寢室への案内を、少将にしいた。

「いつまでもお変わりにならぬ長いお志でございませぬなら、今日明日だけをお待ちくださいませ。もとのお住居へお帰りになりますとまたお悲しみが新しくなりまして、生きた方のようにもなく泣き寝におやすみになつたのでございます。おなだめいたしましてもかえつてお恨みになるのでございますから、私どももその苦痛をいたしたくございません。殿様のことを宮様に申し上げることはできないのでございます」

と少将は言う。

「変なことではないか、聡明な方のように想像していたのに、こんなことでは幼稚なところの抜けぬ方と思うほかはないではないか」

夕霧が自分の考えを言つて、宮のためにも、自分のためにも世間の批議を許さぬ用意の十分あることを説くと、

「それはそうでございませうが、ただ今ではお命がこのお悲しみでどうかおなりになる

のでないかということだけを私どもは心配いたしておりまして、そのほかのことは何も考えられないのでございます。殿様、お願いでございますから、しいて御無理なことはあそばさないでくださいませ」

と少将は手をすり合わせて頼んだ。

「聞いたことも見たこともないお取り扱いだ。過去の一人の男ほどにも愛していただけない自分が哀れになる。世間へも何の面目があると思う」

失望してこう言う夕霧を見てはさすがに同情心も起こった。

「聞いたことも見たこともないと申しますことは、あなた様のあまりにお早まりになった御用意のことでございますよう。道理はどちらにあると世間が申すでございますようか」

と少し少将は笑った。こんなふうには強く抵抗をしてみても、今はよその人でなく主人と召使の関係になっている相手であるから、拒み続けることはさせないで、少将をつれて、おおよその見当をつけた宮の御寢室へはいつて行つた。宮はあまりに思いやりのない心であると恨めしく思召されて、若々しいしかただと女房たちが言つてもよいという気におなりになって、内蔵うちくらの中へ敷き物を一つお敷かせになって、中から戸に錠をかけてお寢やすみになった。しかもこうしておられることもただ時間の問題である、こんなふうにも常規を

逸してしまった人は、いつまで自分をこうさせてはおくまいと悲しんでおいでになった。大將は驚くべき冷酷なお心であると恨めしく思ったが、これほどの抵抗を受けたからといって、自分の恋は一步もあとへ退くものではない、必ず成功を見る時が来るのであるというこんな自信を持つてこの夜を明かすのであつて、たに溪を隔てて寝るといふ山鳥の夫婦のような気がした。ようやく明けがたになった。こうして冷淡に扱われた顔^を皆に見せることが恥ずかしくて大將は出て行こうとする時に、

「ただ少しだけ戸をおあけください。お話したいことがあるのですから」としきりに望んだがなんらの反応も見えない。

「うらみわび胸あきがたき冬の夜にまたさしまさる関の岩かど

言いようもない冷たいお心です」

と言つて、それから泣く泣く出て行つた。

大將は六条院へ来て休息をした。はなちるさと花散里夫人が、

「一条の宮様と御結婚なすつたと太政大臣家あたりではお噂うわさしているようですが、ほんと

うのことはどんなことなのでしょう」

とおおように尋ねた。御簾みすに几帳きちようを添えて立ててあつたが、横から優しい継母の顔も見えるのである。

「そんなふううわさに噂もされるでしょう。亡なくなられた御息所みやすどころは、最初私が申し込んだころにはもつてのほかのこのように言われたものですが、病気がいよいよ悪くなったところに、ほかに託される人のないのが心細かったのですか、自分の死後の宮様を御後見するようにというような遺言をされたものですか、初めから好きだった方でもあるのですから、こういうことにしたのですが、それをいろいろに付会した噂もするでしょう。そう騒ぐことでないことを人は問題にしたりしますね」

と夕霧は笑つて、

「ところが御本人はまだ尼になりたいとばかり考えておいでになるのですから、それもそうおさせして、いろいろに続き合つた面倒な人たちから悪く言われることもなくしたほうがよいとは思われますが、私としては御息所の遺言を守らねばならぬ責任感があつて、ともかくも形だけは私が良人おとこになつて同棲どうせいすることにしたのです。院いんがこちらへおいでになりました時にもお話のついでにそのとおりに申し上げておいてください。堅く通して来

ながら、今になって人が批難をするような恋を始めるとはけしからんなどと言いにならないかと遠慮をしていたのですが、実際恋愛だけは人の忠告にも自身の心にも従えないものなのですからね」

とも忍びやかに言うのだった。

「私は人の作り事かと思つて聞いていましたが、そんなことでもあるのですね。世間にはたくさんあることですが、三条の姫君がどう思つていらつしやるだろうかとおかわいそうですよ。今まであんなに幸福だったのですから」

「可憐かれんな人のようにお言いになる姫君ですね。がさつな鬼かれんのような女ですよ」

と言つて、また、

「決してそのほうもおろそかになどはいたしませんよ。失礼ですがあなた様御自身の御境遇から御推察なすつてください。穏やかにだれへも好意を持つて暮らすのが最後の勝利を得る道ではございませんか。嫉妬しつと深いやかましく言う女に対しては、当座こそ面倒だと思つてこちらにも慎むことになるでしょうが、永久にそうしていられるものではありませんから、ほかに対象を作る日になると、いつそうかれはやかましくなり、こちらは倦怠けんたいと反感をその女から覚えるだけになります。そうしたことで、こちらの南の女王の態度といい、

あなた様の善良さといい、皆手本にすべきものだ。私は信じております」

と継母をほめると、夫人は笑つて、

「物の例にお引きになればなるほど、私が愛されていない妻であることが明瞭めいりょうになりますよ。それにしてもおかしいことは、院は御自身の多情なお癖はお忘れになったように、少しの恋愛事件をお起こしになるとたいへんなことのようにお訓さとしなろうとしたり、蔭かげでも御心配になったりするのを拝見しますと、賢がる人が自己のことを棚たなに上げているということのような気がしてなりませんよ」

こう花散里夫人が言った。

「そうですよ。始終品行のことで教訓を受けますよ。親の言葉がなくても私は浮気うわきなことなどをする男でもないのに」

大将は非常におかしいと思うふうであった。

院のお居間へも来た大将を御覧になつて、院は新事実を知つておいでになつたが、知つた顔を見せる必要はないとしておいでになつて、ただ顔をながめておいでになるのであつた。それは非常に美しく、今が男の美の盛りのような夕霧であつた。今問題になつてゐるような恋愛事件をこの人が起こしても、だれも当然のことと認めてしまふに違ひないと思

召された。鬼神でも罪を許すであろうほどな鮮明な美貌びぼうからは若い光と匂においが散りこぼれるようである。感情にまだ多少の欠陥のある青年者でもなく、どこも皆完全に発達したきれいな貴人であると院は御覧になつて、問題の起こるのももつともである。女でいてこの人を愛せずにおられるはずもなく、鏡を見てみずから慢心をせぬわけもなからうとわが子ながらもお思いになる院でおありになつた。

昼近くなつて大将は三条の家へ歸つたのであつた。家へはいるともうすぐに何人もの同じほどの子供たちがそばへまつわりに来た。夫人は帳台の中に寝ていた。大将がそこへ行つても目も見合わせようとしない。恨めしいのであらう、もつともであると夕霧も知つているのであるが、氣にとめぬふうをして夫人の顔の上にかかった夜着の端をのけると、「ここをどこと思つておいでになつたのですか。私はもう死んでしまいましたよ。平生から私のことを鬼だと言ひになりますから、いつそほんとうの鬼にならうと思つて」と夫人は言つた。

「あなたの気持ちは鬼以上だけれど、あなたの顔はそうでないから私はきらいになれないだろう」

何一つやましいこともないようにこんな冗談じょうだんを言う良人おととを夫人は不快に思つて、

「美しい恋をする人たちの中に混じって生きていられない私ですから、どんな所でも行つてしまいます、もうあなたの念頭になぞ置かれたくない。長くいっしょにいたことすら後悔しているのですから」

と言つて、起き上がった夫人の愛嬌あいきょうのある顔が真赤まつかになつていて一種の魅力をもつていた。

「子供らしく始終腹をたてる鬼だから、もう見なれて怖ろしい気はしなくなつた。少し恐ろしいところを添えたいね」

と良人が冗談事じょうだんごとにしてしまおうとするのを、

「何を言っているのですか。おとなしく死んでおしまいなさいよ。私も死にますよ。いろんなことを聞いているとますますあなたがいやになりますよ。置いて死ねばまたどんなことをなさるかと気がかりだから」

と腹をたてるのであるが、ますます愛嬌の出てくる夫人を夕霧は笑顔えがおで見ながら、

「近くで見るのがいやになつても、私の噂を無関心には聞かないでしょう。あなたはどんなに二人の宿縁の深いかを知らすために、私を殺して自分も死のうとこののですね。二人の葬儀をいっしょにしてもらおうというような約束は前にしてあつたのだからね」

大将はまだ夫人の嫉妬しつとに取り合わないふうをして、いろいろにすかしたり、なだめたりしている、若々しく単純な性質の夫人であるから、良人の言葉はいいかげんな言葉であると思いつながらきげんも機嫌が直つてゆくのを、哀れに思いながらも、大将の心は一条の宮へ飛んでいた。あちらも意志の強いばかりの女性とはお見えにならぬが、やはり自分との結婚を肯定することはできずに、尼にでもなつておしまいになれば、自分の不名誉であると思うと、当分は毎夜あちらに行つていねばならぬとあわただしい気がして、日の暮れていく空をながめても、まだ今日でさえお返事をくださらないではないかと煩悶はんもんされた。昨日から今日へかけて何一つ食べなかつた夫人が夕食をとつたりしていた。

「昔から私はあなたのために、どれほどの苦勞をしたことだろう。大臣が冷酷な処置をおとりになつたから、失恋男とだれにも言われるのを我慢して、あちこちからある縁談を皆断つて、すべて棄権をしてしまつていたようなことは女だつてそうはできないことだと皆言いましたよ。どうしてそんなにしていられたらうと、自分ながら若い時の自重心を認めないではいられないのですからね。今のあなたは私をあくまで憎んでいても、愛すべき人たちが家の中いっぱいにいるのだから、あなた一人の問題ではなくなつたような現在に、軽々しい挙動はできないではありませんか。よく見ていてください。どんなに変わら

ぬ愛を持つている私であるかを、長い将来に見てください。命だけではあなたとさえ引き離されることがあるでしょうがね」

こんな話になつて大將は泣き出した。夫人も昔のことを思い出すと、あんなにもして周囲に打ち勝つて育ててきた恋から夫婦になつている自分たちではないかと、さすがに宿縁の深さも思われるのであつた。曇み目の消えた衣服を脱ぎ捨てて、ことにきれいなのを幾つも重ね、薫香たきもので袖そでを燻くすべることもして、化粧もよくした良人が出かけて行く姿を、灯ひの明りで見ていると涙が流れてきた。夕霧の脱いだ单衣ひとえの袖を、夫人は自分の座のほうへ引き寄せて、

「馴なるる身を恨みんよりは松島のあまの衣にたちやかへまし

どうしてもこのままでは辛抱しんぼうができない」

と独言ひとりごとするのに夕霧は気づくと、出かける足をとめて、

「ほんとうに困つた心ですね。」

松島のあまの濡衣ぬれぎぬ馴れぬとて脱ぎ変へつてふ名を立たためやは」

と言った。急いだからであろうが平凡な歌である。

一条ではまだ前夜のまま宮が内蔵くらからお出にならないために、女房たちが、

「こんなふういつまでもしておいでになりましたは、若々しい、もののおわかりにならぬ方だという評判も立ちましようから、平生のお座敷へお帰りになりました、そちらでお心持ちを殿様の御了解なさいますようにお話しあそばせばよろしいではございませんか」

と言うのを、もつともなことに宮もお思ひになるのであるが、世間でこれからの御自身がお受けになる譏そしりもつらく、過去のあるころにその人に好意を持っておいでになった御自身をさえ恨めしく、そんなことから母君を失ったとお考えになると最もいとわしくて、この晩もお逢あいにはならなかった。

「あまりに、御冷酷過ぎる」

こんな気持ちをいろいろに言つて取り次がせて夕霧はいた。女房たちも同情をせずにおられないのであった。

「少しでも普通の人らしい気分が帰ってくる時まで、忘れずにいてくださつたならとおつ

しやるのでございます。母君の喪中だけはほかのことをいっさい思わずに謹慎して暮らしたいという思召しが濃厚でおありあそばす一方では、知らぬ者がないほどにあなた様のごとが世間へ知れましたのを残念がつておいでになるのでございます」

「私の愛は噂うわさとか何とかいうものに左右されない絶大なものなのだがね。そんなことが理解していただけないとは苦しいものだ」

と大将は歎息して、

「普通にお居間のほうへおいでになれば、物越して私の心持ちをお話しするだけにとどめて、それ以上のことはまだいつまでも待つていいのです」

同じようなことをまた取り次がせるのであったが、

「弱いものがこんなに悲しみに疲れております際に、しいていろいろなことをおっしゃるのが非常にお恨めしく思われるのでございます。人が見てどう私が思われることでしょう。その一部は私の不幸なせいでもあるでしょうが、あなた様がお一人ぎめをあそばしたからだとこれを思います」

とまた御抗弁になった。まだ親しもうとあそばすふうはない。そうは言っても、いつまでも真の夫婦になりえないことは、人の口から世間へも伝わるであろうから恥ずかしいと、

この女房たちに対してさえきまり悪く思う大将であった。

「実際のことは宮様の御意志どおりの関係にとどめるにしても、この状態はあまりに変則だ。またそうであるからといって、私が断然来なくなつたら、宮様はどういう世評をお取りになるだろう。あまりに人生を悲観なされ過ぎて、御幼稚な態度をお改めにならないのを私は宮様のために惜しむ」

などと大将が責めるのに道理があるように少将は思い、また夕霧の様子には気の毒で見えおられぬところがあつて、女房たちが通つて行く出入り口にしてある内蔵の北の戸から大将を入れた。ひどいことをする恨めしい人たちであると宮は女房をお思いになり、こうしてだれの心も利己的になるのであるから、これ以上のことを女房たちからされないものでもないとお考えになると、その人ら以外に頼む者のない今の御境遇をかえすがえす悲しくお思いになった。男は宮のお心の動かねばならぬようにして多くささやくのであるが、宮はただ恨めしくばかりお思いになつて、この人に親しみを見いださうとはあそばさない。「こんなふうにあらん限りの侮蔑ぶべつを加えられております私が非常に恥はずかしくて、あるまじい恋をし始めました初めの自分を後悔いたしますが、これは取り返さうものではありませんし、あなた様のためにももうそれはしてならないことです。ですからもう御自分は

どうでもよいという徹底した弱い心におなりなさい。思うことのかなわないう時に身を投げ
る人があるのですから、私のこの愛情を深い水とお思いになって、それへ身を捨てるとお
思いになればよいと思います」

と夕霧は言った。単衣ひとえの着物にお身体からだを包むようにして、ほかへお見せになる強さとい
つては声を出してお泣きになることよりおできにならないのも、あくまで女らしくお気の
毒なのをながめていて、なぜこうであろう、こんなにまで自分をお愛しになることが不可
能なのであろうか、どんなに許しがたく思う人といつても、これほどの志を見ていては自
然に心のゆるんでくるものであるが、岩や木以上に無情なふうをお見せになるのは、前生
の約束がそうであるためで、自分に憎悪ぞうおをお持ちにならねばならぬ運命を持つておいでに
なるのではなからうかと、こんなことを思った時から大将はあまりなお扱いに憤りに似た
気持ちが起こって、三条の夫人が今ごろどう思っているかと考えだすと、単純な幼心に思
い合った昔のこと、近年になつて望みがかない、同棲どうせいすることのできて以来の信頼し合
つた夫婦の情味などが思われて、自身のし始めたことではあるが、この恋が味気なくなつ
て、もうしいて宮の御機嫌きげんをとろうとも努めずに歎き明かした。こんなみじめなことで来
たり出て行ったりすることもきまり悪くこの人は思つて、今日はこちらにとどまっている

ことにして落ち着いているのにも、宮は反感がお持たれになって、いよいよといふうを
 お見せになることが増してくるのを、幼稚なお心の方であると、恨めしく思いながらも哀
 れに感じていた。蔵の中も別段細かなものがたくさん置かれてあるのでなく、香の唐櫃、
 お置き棚だななどだけを体裁よくあちこちの隅すみへ置いて、感じよく居間に作って宮はおいでに
 なるのである。中は暗い気をする所へ、出たらしい朝日の光がさして来た時に、夕霧は被
 いでおいでになる宮の夜着の端をのけて、乱れたお髪ぐしを手でなで直しなどしながらお顔を
 少し見た。上品で、あくまで女らしく艶えんなお顔であった。男は正しく装っている時以上に、
 部屋の中での柔らかな姿が顔を引き立ててきれいに見えた。柏かしわぎ木が普通の風采ふうさいでしか
 ないのにもかかわらず思い上がり切っていて、宮を美人でないと思うふうを時々見せたこ
 とを宮はお思い出しになると、その当時よりも衰えてしまった自分をこの人は愛し続ける
 ことができないであろうとお考えられになって、恥はずかしくてならぬ気があそばされるの
 であつた。

宮はなるべく樂觀的にものを考えることにお努めになつてみずから慰めようとしておい
 でになるのであつた。ただ複雑な関係になつて、あちらへもこちらへも済まぬわけになる
 ことを苦しくお思いになるのと、おりが母君の喪中であることによつてこうした冷ややか

な態度をおとり続けになるのである。

大将の手水や朝餉の粥が宮のお居間のほうへ運ばれた。この際に喪の色を不吉として、なるべく目につかぬようにこの室の東のほうには屏風を立て、中央の室との仕切りの所には香染めの几帳を置いて、目に立つ巻き絵物などは避けた沈の木製の二段の棚などを手ぎわよく配置してあるのは皆大和守のしたことであった。派手な色でない山吹色、黒みのある紅、深い紫、青鈍などに喪服を着かえさせ、薄紫、青朽葉などの裳を目だたせず用いさせた女房たちが大将の給仕をした。今まで婦人がただけのお住居であつて、規律のくずれていたのを引き締めて、少数の侍を巧みに使い不都合のないようにしているのも、皆一人の大和守が利巧な男だからである。こうして思いがけず勢力のある宮の御良人がおできになったことを聞いて、もとは勤めていなかった家司などが突然現われて来て事務所に詰め、仕事に取りかかっていた。

実質はともかくも、この家の主人らしい生活を大将が一条で始めている数日間を、三条の夫人はもう捨てられ果てたもののように見て、これほど愛をことごとく新しい人に移すこともしないであろうと信頼していたのは自分の誤解であつた、忠実であつた良人がほかに恋人のできた時は、愛の痕跡も残さず変わってしまうものだと言ふのは嘘でない

と、苦しい体験をはじめるといふ気もしてこの侮辱にじつと堪えていることはできないことであると思つて、父の大臣家へ方角除けよに行くと言つて邸やしきを出て行つた。女御にょごが実家に帰つてゐる時でもあつたから、姉君にも逢つて、悩ましい気持ちの少し紛らすこともできた雲井くもいの雁夫人かりは、平生のようにすぐ翌日に邸へ帰るようなこともせず父の家の客になつてゐた。これはすぐに左大将へも聞こえて行つた。そんなことがあるようにも予感されたことである、はげしい性質の人であるからと大将は思つた。大臣もまたりつぱな人物でありながら大人たいじんらしい寛大さの欠けた性格であるから、一徹に目にも物を見せようとされないものでもない、失敬である、もう絶交するというような態度をとられて、家庭の醜態が外へ知られることになつてはならぬと驚いて、三条へ歸つて見ると、子供は半分ほどあとに残されているのであつた。姫君たちと幼少な子だけを夫人はつれて行つたのである。父を見つけて喜んでまつわりに来る子もあれば、母を恋しがって泣く子もあるのを、大将は心苦しく思つた。手紙をたびたびやつて迎えの車を出す、夫人からは返事もして来なかつた。こうして妻に意地を張られるようなことは、自分らの貴族の間にはないことであるがと、うとましく思いながらも、大臣へ対しての義理を思つて、日の暮れるのを待つて自身で夕霧は迎えに行つた。

「寢殿にいらつしやいます」

——ということで、平生行つて使つてゐる座敷のほうには女房だけがいた。男の子供たちだけは乳母めのとに添つてここにいた。

「今さら若々しい態度をとるあなたではありませんか。かわいい人たちをあちらこちらへ置きはなしにして、自身は寢殿でお姫様に帰つた気でいられるあなたの気持ちは解釈に苦しむ。私への愛情がそんなふうになん少くないとは私にもわかつてゐるのですが、昔からあなたにばかり惹ひかれる心を私は持つてゐるし、今ではおおぜいのかわいそうな子供ができてゐるのですから、二人の結合のゆるむことにはないと信じていたのに、ちよつとしたことになつて、こんな扱いを私になさることはいいことだろうか」

取り次ぎによつて夕霧はこう妻を責めた。

「もうすべてのことがお氣に入らないものになつてしまつたのですから、お困りになる私の性質は今さら直す必要もないと思ひます。かわいそうな子供たちだけを愛してくださいませばうれしく思ひます」

と夫人は返事をさせた。

「おとなしい御挨拶だ。結局はだれの不名誉になることとお思ひになるのだろうか」

と言つて、しいて夫人の出で来ることも求めずに、この晩は一人で寝ることにした。どちらつかずの境遇になつたと思ひながら、子供たちをそばへ寝させて大将は女二にょにの宮みやの御様子も想像するのであつた。どんなにまた煩悶はんもんをしておいでになる夜であらうなどと考えると苦しくなつて、こんな遣やる瀬せない苦しみばかりをせねばならぬ恋というものをなぜおもしろいことに人は思うのであらうと、懲りてしまひそうな氣もした。夜が明けた時に、「こんなことを若夫婦のように言い合つているのも恥ずかしいことですから、だめならだめとあきらめますが、もう一度だけでもどおりになつてほしいという私の希望をいれたらどうですか。三条にいる小さい人たちもかわいそうな顔をして母を恋しがっていました。選よつて残しておいでになつたのにはそれだけの考くえがあるのでしようから、あなたに愛されぬ子供達を私の手でどうにか育てましょう」

とまた多少威嚇いかく的なことを夫人へ言つてやつた。一本氣なこの人は自分の生んだ子供たちまでもほかの家へつれて行くかもしれぬという不安を夫人は覺えた。

「姫君を本邸のほうへ歸してください。顔を見に来ることもこうしたきまりの悪い思ひを始終しなければならぬことです。たびたびはようしません。あちらに残つてゐる子供たちも寂しくてかわいそうですから、せめていっしょに置いてやりたいと思ひます」

とまた大将は言つてよこした。そうしてから小さくてきれいな顔をした姫君たちが父のいる座敷へつれられて来た。夕霧はかわいく思つて女の子たちを見た。

「お母様の言うとおりになつてはいけませんよ。ものの判断のできない女になつては悪いからね」

などと教えていた。

大臣は娘と婿のこの事件を聞いて外聞が悪がつていた。

「しばらく静観をしているべきだった。大将にも考えがあつてしていたことだろうからね。婦人が反抗的に家を出て来るようなことは軽率なことに見られて、かえつて人の同情を失つてしまう。しかしもうそうした態度を取りかけた以上は、すぐに負けて出てはならない。そのうちに先方の誠意のありなしもわかることだから」

と娘に言つて、一条の宮へ蔵くらうど人少将を使いにして大臣は手紙をお送りするのであつた。

契ちぎりあれや君を心にとどめおきて哀れと思ひ恨めしと聞く

無関心にはなれません因縁があるのでございますね。

この手紙を持つて、少将はずんずん宮家へはいつて来た。南の縁側に敷き物を出したが、女房たちは応接に出るのを氣づらく思った。まして宮はわびしい気持ちになつておいでになつた。この人は兄弟の中で最も風采ふうさいのよい人で、落ち着いた態度で邸やしきの中を見まわしながらも、亡なき兄のことを思い出しているふうであつた。

「始終伺つている所のような氣になつて私はいるのですが、そちらでは親しい者とお認めくださらないかもしれませんね」

などと皮肉を少し言う。大臣への返事をしにくく宮は思召して、

「私にはどうしても書かれない」

こうお言いになると、

「お返事をなさいませんと、あちらでは礼儀のないようにお思ひになるのでございませうし、私どもが代わつて御挨拶あいさつをいたしておいてよい方でもございせんから」

女房たちが集まつて、なおもお書きになることをお促しすると、宮はまずお泣きになつて、御息所みやすどころが生きていたなら、どんなに不愉快なことで自分の今日のことを思つても、身に代えて罪は隠してくれるであろうと母君の大きな愛を思い出しながら、お書きになる紙の上には、墨よりも涙のほうが多く伝わつて来てお字が続かない。

何故なにゆゑか世に数ならぬ身一つを憂うれしとも思ひ悲しとも聞く

と実感のままお書きになり、それだけにして包んでお出しになった。少将は女房たちとしばらく話をしていたが、

「時々伺っている私が、こうした御簾みすの前にお置かれすることは、あまりに哀れですよ。これからはあなたがたを友人と思つて始終まいますから、お座敷の出入りも許していただければ、今日までの志が酬むくいられた気がするでしょう」

などという言葉を残して蔵人少将は帰った。

こんなことから宮の御感情はまたまた硬化していくのに対して、夕霧が煩悶はんもんと焦しょうそ躁そうで夢中になつている間、一方で雲井の雁夫人の苦悶くもんは深まるばかりであった。こんな噂うわさを聞いている典侍ないしのすけは、自分を許しがたい存在として嫉妬しつとし続ける夫人にとって今度こそ悔りがたい相手が出現したではないかと思つて、手紙などは時々送つているのであつたから、見舞いを書いて出した。

数ならば身に知られまし世の憂うれきを人のためにも濡ぬらす袖そでかな

失敬なというような気も夫人はするのであったが、物の身にしむころで、しかも退屈な中においてはこれにも哀れは覚えなくてもなかつた。

人の世の憂きを哀れと見しかども身に代へんとは思はざりしを

とだけ書かれた返事に、典侍はそのとおりに思うことであろうと同情した。

夫人と結婚のできた以前の青春時代には、この典侍だけを隠れた愛人にして慰められていた大将であつたが、夫人を得てからは来ることもたまさかになつてしまつた。さすがに子供の数だけはふえていった。夫人の生んだのは、長男、三男、四男、六男と、長女、二女、四女、五女で、典侍は三女、六女、二男、五男を持つていた。大将の子は皆で十二人であるが、皆よい子で、それぞれの特色を持つて成長していった。典侍の生んだ男の子は顔もよく、才もあつて皆すぐれていた。三女と二男は六条院の花散里はなちるさと夫人が手もとへ引き取つて世話をしていた。その子供たちは院も始終御覧になつて愛しておいでになつた。

それはまったく理想的にいつているわけである。

青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 中巻」角川文庫、角川書店

1971（昭和46）年11月30日改版初版発行

1994（平成6）年6月15日39版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年1月15日4版を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2003年5月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

源氏物語

夕霧二

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>